

Brice Dellspenger / ブリス・デルスペルジー  
Body Double X / ボディー・ダブル X

2000年、フランス、1時間42分、英語字幕  
出演：Jean-luc Verna / ジャン=リュック・ベルナ

ブリス・デルスペルジー は1972年生まれ、ヨーロッパを中心に活躍し、昨年のパリ(エール・ド・パリ)、今年2月に行われたニューヨーク(チーム・ギャラリー)での上映会や個展が話題を呼ぶ中、今回初めて日本で紹介される注目のフランスの現代美術作家です。「BODY DOUBLE」と題された映像作品シリーズでは、トランスヴェスタイトの俳優(女優?)を起用し、オリジナル作品の音声そのままにリップシンク(口パク)と陳腐な映像の合成で、ブライアン・デ・パルマやヒッチコックなどの往年の名画をリメイクしています。作品タイトルに象徴される役者のすり替えは、映画におけるジェンダーを攪乱し、虚構を増幅させたいかにもキャンブな映像はコード化された常套的なイメージを弄びます。今回上映される「BODY DOUBLE X」(1998-2000年制作)は、アンドレ・ズロウスキー監督の長編映画「L'important c'est d'aimer」(仏1975年)を完全リメイクした作品で、主演にジャンリュック・ベルナ (Jean-luc Verna、同じくパリを拠点に活躍するアーティスト)を起用し、オリジナル作品のほとんどのキャストを1人で演じるというものです。

-----  
BODY DOUBLE X (オリジナル: "L'important c'est d'aimer")

ギャング達の写真を撮るフリーランスの写真家セルヴェ・モンは、女優への野心を持ちながらもチャンスに恵まれず生活のために低予算のつまらない映画(安手のポルノ映画)に出演しているナディヌ・シェヴァリエに出会う。ナディヌの夫、ジャックは粗野で自信のない男だが、かつて精神的に参ってしまっていたナディヌを支えてくれたこともあってセルヴェに魅かれる一方で、彼女は夫とは離れ難い感情を抱いていた。ナディヌとセルヴェが愛し合っているのは明らかだったが自分たちの関係を手垢のみれた情事にしたくはなかった彼等はお互いに距離をおいていた。セルヴェは非合法的な金貸しから借金して「リチャード三世」の舞台を制作しナディヌを出演させた。セルヴェはナディヌの心を金で買ったように思われたくないがために舞台監督に自分が彼女の手助けをしたのを明かさぬように頼んだ。そしてジャックがナディヌの心離れに気付いたとき、事件が起こった.....。濃厚でリッチ、エロティックなズロウスキー・スタイルの映画。キワモノ的人気を誇るズロウスキー監督であるが、この作品で1976年セザール賞(フランス)を受賞。「ポゼッション」「わたしの夜はあなたの昼より美しい」などの作品は日本でも秀作として認められている。

#### ●雑誌記事

ポストモダンの手法であるアプロプリエーションの技法を皮肉のかの様なこの手法を用い、キャンブな画像を展開することで、作家は、悪趣味で低俗なものと辛らつなまでに美しいものの境界線を楽しんでいるように見える。  
- "Art In Review" The New York Times, Friday March 8, 2002

登場人物がごちゃまぜになる中で、我々は、この作品はもはやオリジナルの作品とはかけ離れたもので、映画とは所詮フィクションの世界であるということ、また観るものファンタジーなのであるということを再確認するのである。

- Time Out, New York, Issue 336 March 7-14, 2002

デルスペルジーの繰り広げる、1人2役の世界は、我々に男らしさや女らしさとはなにかといった問題提起を投げかける。ブルーシートを使って特殊撮影された合成画面は、このパロディー映画において重要な効果を発揮している。何故なら観るものは、作品中で展開されるジェンダースワッピングに混乱するが、敢て合成とわかる様に編集された画面は、その困惑を助長しているからである。

- contemporary, May Issue

「ボディー・ダブル(X)」は、オリジナルに何らかの敬意を表したのではなく、既存の作品に上書きし、代役を使い、古いコンテナから出てきた、さして新しくもないキャンバスに描かれた絵画のようなものである。流血シーンに始まり流血シーンに終わるこの作品は、ズロウスキーの映画を褒めるのが目的ではなく、オリジナル作品を観ずとも、ブリス・デルスペルジーによるこの添加物たっぷりの作品を観さえすればよいのである。

#### ●ブリス・デルスペルジーの言葉

「これがリメイクだと言っても誰も信じてはくれないだろう」

「僕はフィクションを空っぽにして、映画そのもののもつ力の全てを吸収したい」

「イメージの辛辣さを投げ返す」